

NTS物語

番外編2

新・天のシルクロード

～凧はいつ空を舞った?～ (8) 奇跡の凧の物語

代表取締役 吉田 隆

●奇跡の凧

慶長17～18(1612～13)年の春の夜、長崎市民は港を見下ろす稲佐山上空に、闇を突き、天より光明が下るのを見た。最初、それは明星と思われたが、橙色の灯りは時には妖しく上下に揺れ、時には大小に明滅し変化(へんげ)する様は、異界の訪問者のようだと人々は口々に噂しあつた。

開港直後人口千人ほどのこの寒村は、慶長の頃、五万人を擁する都市へと急速な発展を見せた。また当時は市民の多くが伴天連(クリスチャン)の徒でもあつた。天正15(1587)年、秀吉はバテレン追放令を公布し、続いて慶長元(1587)年、西坂の地で聖俗26名が磔刑となつた。このとき大勢刑死したにも係らず、神の奇跡が起こらなかつたので、伴天連は長い間、何かが起こることを期待していた。そんな折のことでもあり、人々はこれこそ神の啓示と喜んだ。しかし、これは伴天連を欺こうとする長崎代官長谷川藤広が、烏賊幟(イカノボリ)にローソクを燈して、稲佐山から長崎上空に揚げたものであつた。伴天連は代官の企みであることを知り無念に思ったが、泣寝入りする外なかつた。代官はひそかにほくそ笑んだ、と背信の徒、巴鼻庵(ハビアン)はその著『破堤宇子(ハデウス)』で語る。(『凧大百科』より)

イカと呼んだのは他に呼び名を知らなかつたからで、実はこの凧はイカではなかつた。

●浄安寺の凧

それから200年ほど後の文政4(1819)年頃の春の夜、長崎市中央部に位置する金比羅山上空から、奇怪な声の人々の耳に届くというので話題となつた。声に誘われた多くの市民は、天空に二つの大きな赤い竜の目が輝き、山の背に消えるのを見た。二百年前の事件を知らない者はその怪異に怯えたが、知る者たちは誰が何のために‘それ’を揚げたかを詮索した。犯人は、‘浄安寺’の住職住誉津邦であることが分かつた。‘それ’は‘バラモン’と呼ばれた。私は30数年前、その事実をある書で知って浄安寺を訪ねたことがある。驚いたことに、その凧骨は寺の側壁に無造作にかけられたまま残っていたが、その数代後の凧は、明治20年のパリ万国博覧会に出品されたそうである。但し、赤い目の話は、実は私の創作である。

●バラモン

バラモンは、いわば「海賊の凧」である。中国大陸沿岸部を拠点とする海洋民が発明したといわれるが、彼らが航海に必要な天候測定のために揚げられた道具である。日本には15～16世紀、古来、パハン船(八

幡船、倭寇船等)の寄港地だつた平戸経由でもたらされた。17世紀、五島福江藩ではバラモンは武家子弟の武芸の一つで、合図、通信、距離測定等の道具として用いられた。同時にそのころ長崎本土にデビューしたが、本土では大御所‘イカ’が最盛期で、新顔‘バラモン’の本格的普及は18世紀である。浄安寺の和尚が夢中になつたのもその頃である。ところが、これから普及という矢先に島から‘ハタ’というスーパースターがデビューしたため、灯明を吊り下げてもビクともしない大型で実用向きの実力派‘バラモン’の人気は結局、大御所とアイドルの間だけで短命に終わった。しかし、‘バラモン’は現在も平戸、五島など長崎周辺の島々の伝統文化の中になお生き続けている。

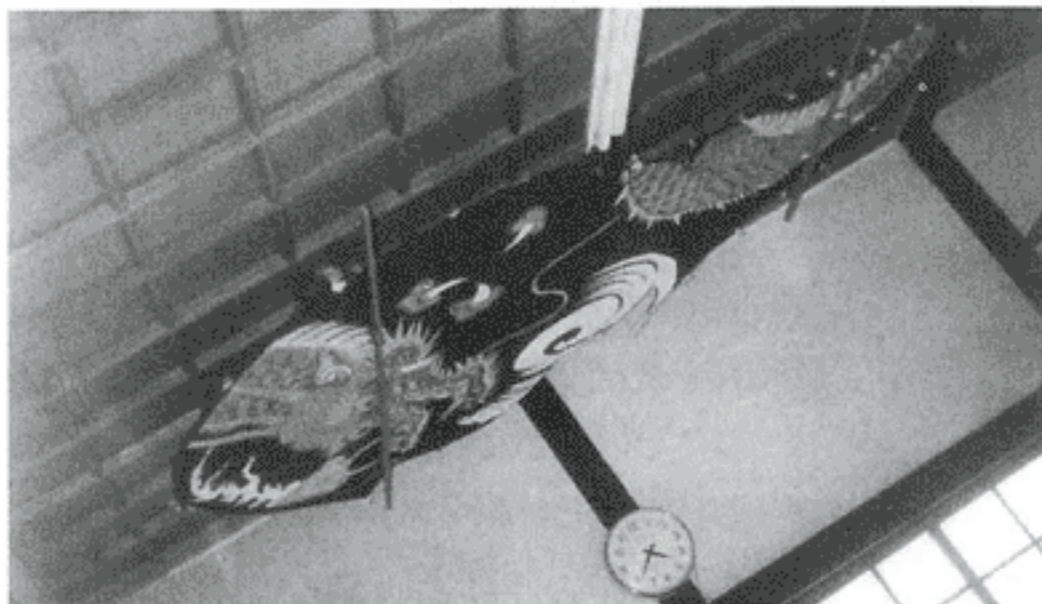
●声の正体

さて、一つ疑問が残る。長崎市民が耳にした奇怪な声の正体は何だつたのか?今回は、かつて天が音楽であふれていた時代の物語で本稿を締めくくる。

(訂正:前号で、長崎の文人西山宗因→関西で活躍した肥後生まれの文人、に訂正)

【参考引用文献】

- 1.『長崎ハタ考』(渡辺庫輔著、長崎県民芸協会、昭和34年)
- 2.『凧大百科～日本の凧、世界の凧～』(比毛一朗著、美術出版社、1997)
- 3.『季刊道具学13号』(吉田隆共著、道具学会、2006)



浄安寺本堂の天井を飾る‘バラモン(婆羅門)’(昭和57年、筆者撮影)



金比羅山から飛翔する婆羅門。揚げるのは浄安寺住職。(原典『長崎名勝図絵』「凧大百科」より)

●編集後記

『誰にも言わないでね、信用してるから』女性の内緒話はここから始まる。翌朝、噂があちこちに飛び交い収拾がつかない状況に陥った経験がある人、たくさんいるだろうな。そして、『信じられない、傷ついた』なんてこぼす。心の傷は時が癒してくれるが、発電プラントについた傷は誰も癒すことができない。私達の日常生活は、『事故は起こらない』漠然とした思いがあり、目に見えない信頼のもと、成り立っているように思われる。起きてからでは遅い事故対策、見えないところで、日々努力されている方がいる事を忘れてはいけない。(あしだ)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ディー・エス「NTSニュース」係
FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース

2006年7月号(通巻89号)
2006年7月7日発行